

〈第34回学会大会（立教大学）パネルディスカッション〉

21世紀の学会発展のビジョンと戦略を考える

コーディネーター：麻生 恵\*

パネラー：鈴木秀雄\*\*・山口有次\*\*\*・西野 仁\*\*\*\*

The Vision and Tactics for Development of Japan Society in the 21st Century

Chair Person : Megumi ASO\*

Symposists : Hideo SUZUKI,\*\* Yuji YAMAGUCHI,\*\*\* Jin NISHINO\*\*\*\*

1. 趣旨説明

21世紀は社会のグローバル化の時代と言われている。様々な規制が取り払われ、自由な競争がなされるなかで、企業をはじめとする様々な組織は、独自の理念のもとに明確なビジョンを描き、社会に向けてのアピールや社会貢献が求められる時代となってきた。

こうした動きの中で、大学という組織を越えた研究（教育）活動の中心である「学会」においても、こうしたものへの対応は、これからの発展を目指す上で避けて通れないものとなりつつある。

これまでも当学会は、レジャー・レクリエーション学の研究方法に関する出版物「レクリエーション学の方法」の編集発行や研究領域の整理・体系化など、学会でなければならない課題に取り組み、それなりの成果をあげてきた。しかし一方で、学会活動がやや停滞気味となり、活動の幅もなかなか広がらないという問題も抱えている。近年の学会を取り巻く社会の変化はきわめて大きく、ここでそれらへの対応を真剣に考えざるを得ない状況に至っている。今年度は、学会が活動を始めて40年の節目であり、「学会活性化委員会」が設置されるなど、こうした問題を議論する好機であると考えられる。

議論の視点は、

①社会の変化や学会へのニーズを認識・把握すること、

②それらを踏まえた学会独自の将来構想（ビジョン）を描き共有すること、

③学会の特性を踏まえた行動計画を検討すること、の3点に集約されると考える。

また、当学会には多彩な分野の人材が集まっているなど、他の学会とは異なる特長もあり、「総合化」の時代にふさわしい条件を備えているという側面もある。

先の「基調講演」では袁茂先生が私たちに沢山の「投げかけ」をして下さった。そこで、ご示唆いただいた新しい時代への方向性や課題を、当学会自身の問題として受け止め、今後の取り組みの方向性を明らかにしていく作業が必要かと考える。

しかし、時間も限られており、いくつかの分野（テーマ）に絞って、より具体的な取り組みについて議論を深めたい。

このディカッションの成果は今年度理事会内に設けられた「学会活性化委員会」で検討し、活性化のための具体的な事業計画に結びつけていきたい。

\*東京農業大学、\*\*関東学院大学、\*\*\*早稲田大学、\*\*\*\*東海大学

\*Tokyo University of Agriculture \*\*Kanto Gakuin University

\*\*\*Waseda University \*\*\*\*Tokai University

## 2. 講師紹介とパネルの観点

以下の3人の方に次のような観点からパネラーをお願いした。

(1)鈴木秀雄(関東学院大学、学会副会長)

当学会の運営基盤の確立に長年尽力。特に、セラピューティックレクリエーション分科会の立ち上げと大会ワークショップの企画実施、「学会活性化委員会」の委員長として学会活性化の大任を担う。こうした豊富な経験をもとに「日本レジャー・レクリエーション学会のこれまでの取り組み」をレビューしながら、当学会の長所や今後の課題、学会活性化への方策についてご発言いただく。

(2)山口有次(早稲田大学理工学部)

余暇開発センターの研究者としてレジャー白書や余暇ビジョン策定の調査研究などに携わる。政策ニーズや産業動向にも目配りのきく希有な人材。こうした経験をもとに社会が当学会に求めるニーズや、それらへの学会の対応の方向性についてご提案いただく。

(3)西野 仁(東海大学体育学部、学会常任理事)

「ゆとり」をテーマとした学際的でユニークな「プロジェクト研究」を実施。国際交流の豊富な経験から、特に近年の東アジア地域の交流活発化の状況を踏まえ、学会の役割として重要な国際化への対応や、研究交流を軸とした様々なアイデアを提案していただく。



パネルディスカッション風景(立教大学、平成16年12月4日)